

サイバーメディアセンター

I	研究水準	研究 23-2
II	質の向上度	研究 23-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度の研究発表は学術論文誌、国際会議合わせて 77 件であり、専任教員一名当たり 3.1 件である。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金は平成 19 年度 17 件、約 5,500 万円で、教員一名当たり 0.7 件、220 万円である。共同研究、受託研究、寄附金等が 19 件、2 億円弱であり、一名当たり 0.8 件、約 750 万円である。競争的研究資金として一名当たり 1,000 万円程度であるなど、活発に研究活動が進められており、優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「共同利用・共同研究の実施状況」のうち、共同利用の実施状況については、計算機利用者数 850 名程度でその機関数は 100 程度である。スーパーコンピュータの稼働率はほぼ 100%で、CPU 利用率は 80%程度であり、十分にその施設は利用されている。共同利用については他の大型計算機センターとともにグリッド計算、次世代科学研究基盤の構築に関する研究を中心に進めていることなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、サイバーメディアセンターの目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、サイバーメディアセンターが想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、卓越した研究業績として、量子ドリフトー拡散モデルの数値解析法の開発があり、他にも、生態学への統計物理修法の適用、口腔機能解析のミドルウェアの整備等の学際的な分野での新たな知見を与える優れた研究がある。共同利用施設を利用した研究にも太陽系の起源の解明等の優れた研究成果が見られる。社会、経済、文化面ではウェブサイト対応の授業システムを開発したことは、情報化社会を支える教育研究基盤の優れた研究成果として評価できる。これらの研究成果で平成 19 年度は 4 件の受賞をしている。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、サイバーメディアセンターの目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、サイバーメディアセンターが想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。